

すめらみことの大御位は申すもかしこくゆゆしきものと、卜部の兼好が、つれづれの草子に書きしは、いと昔のことなれど、ちはやぶる神代のむかしより、このうつせみの今の世に至るまで、こはたれをも知るまことのことにて、かかるすめらみことのいやつぎつぎに嗣がせたまひて おほみかどとして戴きまつりこし、わが大御國の世々の跡をしも思へば、またかしこくありがたき極みなるやも。北畠の准后のきみの、おほやまとは神の御國なりと書かせたまへりしもむべなるものぞ。

ちはやぶる神のむかしゆ定まれるわが日の本の國のいしずゑ

風の音の遠き神の代に み依さしごと承りて かけまくも畏きすめみまのみことの、この中つ御國へ天
下りまさむとしたまひしをりに、いましみことのし

らさむ御國の大御榮えは、天地とともにきはまりなかるべしとの神のみことをたまはりましたまにまに、あが瑞穂の大御國はこのみことのりに違ふことなく背くことなく、すめらみことの大御位は常磐堅磐に揺るぐことなく、あまたの歳月を経て今に至りぬ。天の下四方には國てふ國はさにはあれども、尊きみかどを戴きまつり、いそのかみ古き國柄を傳へ來ませる國は世にもあらじかし。かかるかしこき大御國なれど、今はしもここに暮らせるあをひとくさは、この由をば知らず、自らがおほみたからなるゆゑよしをも正しく教へられもせで、外つ國こそよけれ、羨ましきことぞと思ひ託ちて、深く考へもせで知らざらむがくちをしきわざなるかも。

悲しきは國のもとゐのゆゑよしを知らぬ御民の數のおほかる

すめみまのみことの天降りまししゆ、菅の根の長き時を経て、かむやまといわれひこのすめらみことの、天の下を平らげたまひ整へたまひ、大和の國の檀原の底つ磐根に宮柱ふと敷き立てて、大御位につかせたまひしより、あまつひつぎのつがのきのいや次々に傳へきまして、二千七百てふ數にも近からむ年月を、百あまり二十五代なるすめらみことの、大御位をつがせたまふもいともかしこき貴きことにこそあれ。

つがのきのいや次々につぎませるあまつひつぎのかしこきろかも

いそのかみいや古く、ひさかたのいや遠くはろけき時を経たる大御國の跡を偲びしぬびに思ひまぬらすれば、すめらみことの天の下しろしめすおほみわざの神のみに違ふことなくつむことなく正しく広がりまして、高殿にけぶりの立つをみそなはしまし、平の都におんみづから政きこしめしたまひし平らかに治まる御代など、おほみいついや輝きに輝きましし大御代もあり、またくちをしくも五月蠅なす荒きものふども、星つきよ鎌倉に、鳥が鳴く東の江戸にと、おほみくらゐをなみまつり、神のおほみことに背きまつりて、遠き沖つ島への御心ならぬいでましに、海藻かる海女に紛れてかしこき思ひを託ちたまひ、みよしのの芳野の山に、しづの山がつの伏屋がほどに、み袖濡らしたまふなど恐れ多きしれわざのありしとも。さらに世々のみかどの跡を思ひまぬらせば他に、もくさぐさのことどもありけりとは言へ、そを思へば袖はしをれて執る筆もなんだに濡るるがほどの悲しことも、心勇み立つがに喜ばしく慕はしきこともありけらし。

くれたけのよにうきふしはあるものの曇ることなき君がみいつは

さは言へ、我が國は神の御國にと深く思ひしめ、神のみことを深く信じまぬらせば、なにごとのあらむとも、濁れる水のいつかは澄むとのならひのまにま、さる折には赤きまごころ持ち、やまとだましひの高く清き國民どもの必ず現れいで、すめらみことを輔けまつり、神ながらの正しく直きまさまちに直し導くてふことわりもあるものぞ。

時こそはくだちゆけども國柱もとの姿にたちなほるかな

かるがゆ糸に明治のおほみかどの大御位につかせたまひし時、徳川の内府の長き間にまけよきしまししおほまつりごちを返したいまつりて、鎌倉このかたのものふのまつりごちは朽くいえ、天の下拂ひ清めて再びすめらみこととのしろしめします大御代とこそなれりけれ。なべてをかむやまといはれひこのすめらみことの大御代に神ならはせたまひしこの御代の御榮えは、いそのかみ古き流れの淀みをゆすぎ、進みゆく世のならひを定め、國の礎の堅く揺るぎなき基ぬを築きたまひ、西に東に南に北に國のみいつの輝き満つる御代とはなりぬ。

ことしあれば赤き心のまごころに濁れる水も澄みかへりたり

そが中に、すめらみことの定めましし國の御憲と竹の園生にかかはれる御法とは、我が國の過ぎし昔のためしを汲み深く思ひよく考へ、あまつさへあまたの外つ國々のものをも併せ見て、長きを採り短きを補ひ、彼を採りこれを除きて、おほみかどに仕へまつる人どもの年月ながく作りに作りしものにていとも尊くかしこきものにぞある。

あきらかに治まる御代のさきはひは國のおきてのさだまりてこそ

言はまくもかしこかれども すめらみことの大御位は、神のみことのまにまに定まれるものにて、神のみことのまにまに受けつぎ傳へ來ませるものなれど、そをいかなる世にも動きなく常磐堅磐に傳へいくべき御法の沙汰こそあらまほしければ、ここに越智をちの宿禰すくね博文ぶん、藤原前光の朝臣あそみや井上のこはしらははじめとして、あまたのおほまへつぎみどもの深くかむかへ、凶りに語り、明治のおほみかどの大御掟としてなむ定めまつれるものなりける。世にこれをば皇室すめらみこと典範ていぱんとぞ申すなる。この時を以てうつしみにいますすめらみことは、みかどのみくらぬにましますうちは、おりぬのみかどとならせたまふことなく、その保たせたまふ世を一つの御代の名と定めたまひぬ。

くれたけの代々木の宮に鎮まれる神の定めしおほみのりかな

さこそはあれ、世の移り、時の流れてかはりゆく中に、開け行く世のならひとて人の營みの繁くなりゆき、あまたの外つ國々とも交はりを深め行く中にも、ゆくりなくも行き違ひや様々の人の間、國のあひだに思はくのあやまつこともありて、輝かしき大御代にぬばたまの黒雲かかり、大みいつにかげさすこともいできにけり。かかれれば先のみかどのいとど大御心を惱ませたまひて、國民のうへに恵みの露をかけさせたまひ、戦ひの矛を収めるべく、おほんみづからおほみことのりを玉の御聲もて述べさせたまひけり。あゝゆくりなくも昭和のおほみいくさ熈み、五月雨の降るあめりかのしばし治むる月日の中に、やむなくもあたらしき國の御憲の定められ、竹の園生の御法も改めしめらるゝことしもあめれど、すめらみことの大御位は揺るぐことすらなかりしをただにかしこみ奉るものなりき。

あまつかみ定めたまひしみくらぬはしこのえびすもものいはずあれ

平らかに成るてふ御代となりて、すめらみことの大御位にましますこと二十あまり八年にわたらせたまひ、この間に國の平ぎ民の暮しの安からむことどもをただに祈りたまひ、くぬちことごとくに遠く近くに巡りみゆきいでましたまひては民の暮らしに御心を寄せたまひ、をりをりのわざはひには民の上をも思召したまひ、厚き御恵みをおけたまひましき。また過ぎし戦さに海ゆかば山ゆかばと水漬く草むすかばねとたふれしくさ人の御霊をなごませたまひ、外つ國との誼を広く厚く進めしめたまはむと、天の下四方にいとまなくみゆきいでましたまひしおほん姿こそ忝くもまたかしこけれ。

かしこくもわがおほきみのかけたまふ露はおよびぬ四方のくにぐに

かかればいぬる葉月の八日はも。すめらみことの國民にのりたまふおほみことを謹み拝しまつるに、このうへなき深き大御心にそぞろ心の痛むものなりきかし。あらまほしと願ひたまへるおほんのぞみごとは、おりぬのみかどとなりたまひてむと承りはべりぬ。おほみよはひ八十あまり三つにわたらせたまふ大御身に、二度の篤きみ

やまひに薬師の術をも受けたまひしことをも思ひまゐらせれば、こはただごとにあらずゆゆしきことなるかもと返す返すも思ひまゐらせまつるのみ。

ゆくりなくもおりぬのよしをのたまひぬ心むなしく拜しまつりぬ

こを拜し参らせて國民らの、とありかくありと申すもかしこきものなれど、すみやけくおほみわざを日嗣の皇子に譲りたまひておりぬのみかどとならせたまひ、みこころ安くおはしませと願ふ思ひもまたひとかたならざりき。すめらみことの御上をば知るも、常には思ひ参らせずにある國民も、こたびはしも心の奥がの琴の糸々掻きなられたるがごと、誰もたれもが我が大御國のかしく尊き大御位のこと目覺め、ゆくてはろかに心を寄せまつることとはなれり。

閉ざされし天の岩戸の開くかもすめらぎ仰ぐ民の目覺めは

さはあれこはいかがすべきかは。おりぬのみかどにおはしませむとの思召しは忝きものなれど、かかることは安くにかなひまつるべくにもあらず。あまたのりのりの定め、あれやこれやと重なるものぞかし。また明治の昔におりぬのみかどをゆめ定めたまはざりしは、あまたの憂ひのあればなりけり。この憂ひこそこの世を思へばゆるがせにすべきわざにはあるべきかは。昔おりぬのみかどのおはしまして、平らけく治まりし世もあれば、おりぬのみかどと今のみかどとのこと違ひありて、世をあげてつれなき戦さとなりしこともあれば、明治のおほまへつぎみらの深く憂へ考へしもむべなるやも。

安倍のおとどはも、大御心に添ひまつり安じまつるべくつとめ励むはもはらのことなれど、世に傳へ來ませし大御位の尊く畏きゆゑよしを、よくよく考へ語りて、今ゆゆくさきのいや遠くすゑ永く、この大御位の揺るぐことなく動くことなくいとも重く尊きことなるべきを深く悟りて、慎みて定めまつれかしと、居ても立ちても寝ても覺めても、ただただに思ひまゐらせるのみになむ。秋も深まりてなどか心のおきどころもなし。

すめらぎのみ思ひ重しすめらぎのおほみくらぬはさらにかしこし

神と人とよりてつかふる日の本の國のおきてはゆるぐことなし

(平成二十八年十一月三十日受附)